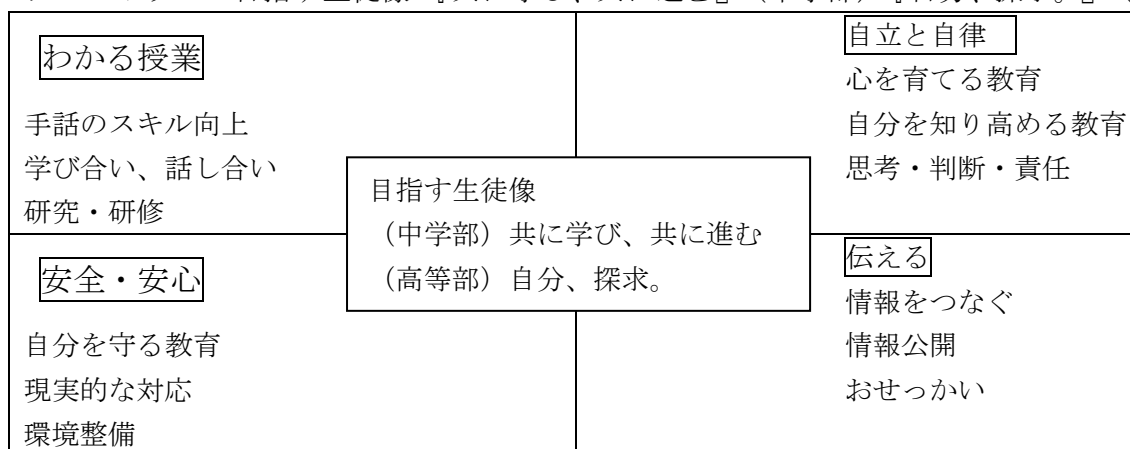


令和5年度学校評価

1 本校の重点目標

スクールポリシー目指す生徒像 『共に学び、共に進む』（中学部）『自分、探求。』（高等部）



『名古屋聾学校への誇りと愛情』『当たり前のことが普通に行われる学校』

2 評価対象

- ・各部（教科、学科の内容も含める）
- ・各分掌
総務、教務、教育情報、生徒指導支援（いじめ防止基本方針に基づく取組を含む）、進路指導
保健体育、自立活動研修
- ・勤務時間の適正な管理及び長時間労働による健康障害防止の実施状況（教頭）

3 令和5年度学校評価 評価結果と課題

(1) わかる授業

中学部ではタブレット端末による学習等を進めた。また、話し合いの場を授業で設定することで、互いに意見を述べ、より多様な視点で考えられるようになってきた。理解度やコミュニケーション力に応じた支援の工夫が今後の課題となる。高等部でもタブレット端末でロイロノートやTeamsを使って、話し合いや意見の共有、個別学習に対応できるように工夫した。生徒の思考力や表現力を高める支援を引き続き探っていきたい。

教員向けのタブレット端末に関する研修会や、教育情報部の職員がICT機器の使用に関する相談に応じることで活用能力の向上に努めた。

教員相互の授業参観を実施し授業力の向上を図った。また、手話通訳士による手話講座、言語聴覚士による発音発語指導の実践、聴覚障害に関する講師を招いての講演会を行った。基本的な手話表現をまとめた動画を作成中であり、聾学校経験の浅い職員に向けての研修の充実が継続的な課題である。

(2) 自立と自律

防災活動検討会と称し、被災した際にどのように行動すべきかを学年・学級単位で話し合う機会を設けた。生徒が積極的に話し合う姿が見られた。

進路指導に関わる情報をホームページ上で公開した。見やすいレイアウトに改善を図っていくことや、進路関係の見学会の機会を増やしていきたい。

(3) 安心・安全

地域の消防局・消防署と連携し、体験的な活動を取り入れた総合防災訓練を実施した。これからの課題として、さまざまな想定を踏まえた現実的な訓練の実施が必要である。

保健面では生徒が自分自身の体の自覚症状を文字にしたり、怪我の原因を説明したりする中でけがや病気の予防について考えることができた。

(4) 『伝える』

P T Aの活動において、P T A役員会で意見交換や情報共有をしながら進めることができた。総務部のメールを活用し保護者と連絡を取り合うことができた。ウェブベルマークの実施など、役員会で共有された情報を役員以外の保護者にも伝える方策を検討していきたい。

4 学校評議員の方より

- ・生徒たちは語彙が少ない。教員が授業を行う上で、外部の手話講座で正しい言葉を学んでほしい。音声の文字変換システムによる字幕は誤変換が多い。
- ・先生たちの手話のスキルを上げないと、生徒たちも誤った手話を使う。生徒自身が共通した正しい手話を知っていないと話し合いができない。対話的授業のためには必要である。
- ・避難訓練など防災教育について、千種聾学校と名古屋聾学校でやり方が違うと、千種聾学校から入学した子どもたちが戸惑うかもしれない。連携を取り、防災教育についてある程度の統一を図ることができるとよい。
- ・防災について、先生がいないときや登下校中、家に親がいないときなどいろいろな想定をして、そのときどうするかを問うような内容になるとよい。
- ・障害特性のある子供の課題について、小中学校、高等学校でアサーショントレーニング（相手の意見を尊重しながらも自分の意見を適切に伝えられるためのトレーニング）を実践しているように、聾学校でも、様々な特性を抱えた友達の理解を進めるような教員の働きかけを考えていけるとよい。発達障害や障害という言葉を使わずに特性を説明できるとよい。何も知らずにいるより、ルールを決めておいた方がお互いに落ち着いて生活できる。
- ・愛知総合工科高等学校で行っている連携教育を参観した。3Dプリンターに驚いた。広くて立派な学校で一緒に学べてよい。
- ・コロナ禍前に比べて、規制が増えていないか。もう少し自由にやってもいいのでは。コロナの関係で先生たちと顔を合わせることがなくなった。子どもたちと一緒に清掃活動をすると元気もらえる。子どもたちを笑って過ごせる元気な子に育ててほしい。

学校評価結果と課題

部・校務	重点目標	具体的方策	評価結果と課題
中学部	・課題解決に向けて生徒が支え合い、話し合う授業づくり	・タブレット等を活用し、生徒自ら調べたり、発表したりする活動を積極的に取り入れ、生徒同士が学び合える場面を多く設定する。	タブレット端末を活用し調べ学習等を進めた。プレゼンテーション資料作成の他、付箋を活用したり、模造紙にまとめたりすることで、生徒一人一人の意見や考えを共有できるようにした。また、それらを基に話し合いの場を設定することによって、互いに意見を述べやすくなり、より多様な多角的な視点で考えられるようになってきた。学年によって、理解度やコミュニケーション力に差があるので、各学年に応じたよりよい支援の方法を引き続き工夫していく必要がある。
高等部	・思考力や表現力を育てる授業づくり	・社会的自立に向けて、外部関係機関と多く連携したり、ICT機器を活用しながら学び合ったりする授業を行う。	外部関係機関との連携については、名城大学経済学部とのSDGs共同学習をはじめとして各学科がそれぞれの特色を生かした教育を進めることができた。ICT機器の活用については、高等部職員のうち36名(80%)が授業で活用しており、使用するアプリケーションもロイノートやTeamsを使って、話し合いや意見の共有、個別学習に対応できるようにそれぞれで工夫できた。今後は、ICT機器を使うなかでどのように支援すると生徒の思考力や表現力をさらに高められるか検討していきたい。
総務部	・教育活動及びPTA活動に関する情報の保護者へ伝達、活発な意見交換	・役員会や総務部のメールを通じて、保護者に随時情報を伝える。 ・役員会等で意見交換の場を設ける。	文化祭模擬店の実施、PTA広報の制作、各研修会への参加及び報告など、役員会において保護者と意見交換や情報共有をしながら進めることができた。総務部のメールを活用し保護者とスムーズに連絡を取り合うことで、各委員会の活動準備を円滑に進められた。ウェブベルマークの実施など、役員会で共有された情報をSNSなどを通じて役員以外の保護者にも伝える工夫が必要である。
教務部	・生徒のICT機器活用機会の拡充	・家庭学習やプリント学習時の課題においてタブレット端末を活用する内容を取り入れる。	生徒の調べ学習のまとめの作成では、プレゼンテーションソフトを活用することで、紙媒体より写真等の加工が容易で、うまくまとめられた。プレゼン資料の作成では、作成途中でもモニターに映し出して互いの進捗状況を共有でき、作成途中を共有することで他者に伝えることを意識する等生徒自身の改善点を発見できた。教員によって機器に対する苦手意識があったり、技量の差が生じたりすることが課題である。
教育情報部	・ICT機器活用に伴う教員・生徒双方の困り感の解消	・生徒、教員の実態に応じて、機器の講習を実施し、設定や使い方の助言を行う。	タブレット端末や学習支援システムに関する研修会を行ったほか、個別の質問には教育情報部の職員が随時対応してICT活用能力の向上に努めた。授業準備の効率化や校務の業務改善を進めるためには、教材データの共有や生成AI等活用が必須であるが、教材データの共有については十分とは言えないため、職員向にさらなる啓発活動が必要である。生成AIに関しては有効な活用法を示すべく研究中である。
生徒指導支援部	・教職員、生徒の防災意識の向上を図る実践的な訓練や活動の計画と実施	・地域の消防局や消防署と連携し、体験的な訓練を実施する。 ・登下校中や校外での安全について考える機会を設ける。	地域の消防局・消防署と連携し、体験的な活動を取り入れた総合防災訓練を実施した。また、防災活動検討会と称し、被災した際にどのように行動すべきかを学年・学級単位で話し合う機会を設け、生徒が積極的に話し合う姿が見られた。しかし、避難訓練の際、放送機器の故障や多数の疾病者が出た場合等、より現実的な訓練を実施できていない現状がある。次年度以降で、さまざまな想定を考えていきたい。
進路指導部	・進学・就職指導に関する情報の、職員・生徒・保護者間の共有	・進学、就職、福祉的な就労についての手引きを、関係者なら誰でも閲覧できる形で公開する。 ・事業所見学会の充実を図る。	高校、大学進学の手引き、就職の手引きを順次ホームページ上で公開した。福祉就労の手引きも今年度中には公開する予定である。手引きの活用状況は未調査であるが、かなり詳細に記載した関係で、見やすいレイアウトになっていない可能性がある。今後は、本手引きの改訂及び周知をしていくことで、情報を共有していきたい。見学会は今年度は福祉就労関係の施設のみであった。次年度以降は機会を増やしていきたい。

学校評価結果と課題

<p>保健 体育部</p>	<p>・怪我をした時や体調が悪 い時の相手への正確な状 況の伝達 ・災害時などを想定した、 自分だけではなく周囲の 状況の正確な伝達</p>	<p>・保健室に来室した際に、自分の症状を正確に伝えられ よう、来室記録などを用意する。 ・生徒指導支援部と連携し、防災訓練時、状況を正確に 伝えられるよう訓練をする。</p>	<p>来室記録を自分で記入することで、自覚症状を文字にし たりけがの原因を説明したり する中で、予防について一緒に考えることができた。し かし、時間がかかるため項目 を絞っての対応になることが多かった。中学部の生徒を 対象に、初の試みである情報 伝達訓練を、千種消防署や本校調理員の協力により実 施した。手話を使わずに 状況を伝える難しさを体感したり、伝え方を工夫したり する様子が見られた。今回の 反省を生かし、より充実した訓練になるよう計画して いきたい。</p>
<p>自立活動 研修部</p>	<p>・教職員の手話のスキル向 上と聴覚障害教育の専門 性を高める研究・研修の充 実</p>	<p>・教職員相互に授業参観をし、相互に学び合う。 ・校外の専門家を活用し、研究・研修会や学習会の充 実を図る。 ・校内外の研究・研修会や学習会を周知徹底し、積極 的な参加を促す。</p>	<p>年間を通して教員相互の授業参観を実施し、職員は積 極的に授業参観をした。ま た、手話通訳士による手話講座を5回、言語聴覚士に よる指導実践を3回、外部講師 による講演会を2回実施するなど、専門的な知識を学 ぶ機会を設けた。今後は、聾学 校経験の浅い職員に向けての研修を充実させることが 課題である。特に年度当初の 研修や情報提供に力を入れる必要があり、現在研修計 画を作成している。また、外 部専門家の協力を得て基本的な手話表現をまとめた動 画を作成中である。今後、そ れらの活用と、さらなる内容の充実を図りたい。</p>
<p>・いじめの早期発見と認知に努めた組 織的対応</p>	<p>・年に3回の生活アンケートを実施し、生徒の心情の変 化を把握する一助とする。 ・いじめ事案報告書を運用する。</p>	<p>年に3回の生活アンケートを実施し、結果をいじめ・不 登校対策委員会で報告した。 また、週に1回の頻度で、生徒指導主事・特別支援教 育コーディネーター・養護教諭 等と生徒の情報交換会を実施し、ケース会議や生徒支 援委員会へつなぐ一助とし た。いじめ事案報告書の周知を図ったが、定着するま でに至っていない現状がある。</p>	
<p>・教職員の協働した業務による、仕事 の効率化や在校時間の縮小</p>	<p>・グループウェアを活用する等、業務の課題を把握す る。その課題に得意分野を生かして協働できるように 職員間で共有する。</p>	<p>業務改善についての課題を運営委員会や職員会議で 共有した。部や分掌で課題を 検討し、業務の精選やマニュアル化などを進めるこ うすることができた。教職員が協働して業 務に当たることについては、今後も協力体制を構築 して進めていきたい。</p>	